百合子へ

　六月三十日、毎年この日が近づくと私はあなたの夢をみます。ブルーのワンピースに金魚の模様のついた赤いブリキのバケツを手にしたあなたは四歳、私は小学校の五年生でした。「お姉ちゃん、紅いほおずきブーブーして」と私に笑いかけてきます。という恐ろしい伝染病に冒されてたった一夜で逝ってしまった幼いあなた。家は隔離され、お葬式を出す事も禁じられて、白い小さな棺に納められたあなたのは父の自転車に乗せられて、たった一人夕闇の中に消えて行きました。庭に白い芙蓉の花が浮かんでいました。何と寂しい野辺の送りだった事でしょう。白い顔であどけなく眠るあなたはまるで白雪姫のようでした。あなたは今、千の風になって宇宙のを吹き流れているのでしょうか。私は六十五歳になりました。あなたに逢えるのもそんなに遠い事ではないでしょう。その時は紅いほおずき、ブーブーして遊びましょうね。

応募時(神奈川県65歳）谷内梨枝子